

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	・ 個別人権課題をテーマとして効果的に取り扱った実践事例
-------	------------------------------

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

奈良県北葛城郡上牧町

○学校名

上牧町立上牧小学校

○学校のURL

<http://www.lint.ne.jp/~kamisho/>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】 18 学級、【特別支援学級】 4 学級、【合計】 22 学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】 527 人（平成27年11月6日現在）

（内訳：1年生 65 人、2年生 71 人、3年生 74 人、4年生 95 人、5年生 96 人、6年生 126 人）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

平成25・26・27年度人権教育研究推進事業人権教育研究指定校

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

家庭・地域が協働して、人権尊重の精神を基盤に、子どもたちの学習意欲を高め、社会の変化に主体的に対応でき、自ら学び、心身ともにたくましく生きる児童を育成する。

- めざす児童像「かん・ま・き」の子
「かん」・・・感性豊かで優しい心を持ち
「ま」・・・学び合い助け合いの態度で
「き」・・・規律ある自律した行動がとれる子

【人権教育に関する目標】

- すべての教育活動において人権尊重の精神を基盤に、一人一人の可能性を最大限に伸ばすとともに、一人一人の違いを豊かさとして捉え、自他ともに大切にする学校文化を創造する。
- 不合理・矛盾や差別に気づき、それを正していく力となる知識や認識、感性を育て、人権を尊重する態度や実践力を身につけさせる。
- 同和問題、障がい者、女性、高齢者、外国人などにかかわる人権問題の歴史と現状を、児童の発達過程や状況などに配意し、体系的・計画的に学ばせる。

○人権教育に係る取組一口メモ

「自らの生き方をつくる子」の育成をめざし、なかまと学び合う学習を基盤にして、問題解決型の人権教育を創造する。

○人権教育にかかる取組の全体概要

自らの生き方を切り拓いていく力へ

～安心した居場所を築き、自尊感情を高める～

- ・ 学び合いを土台にして、分からないこと、困っていること、嫌だということなどを教室のなかまに出し、それに対してきちんと応えてくれるつながりをどの授業の中でも創っていく。
- ・ その日々の積み重ねにより、一人一人の子どもが、教室の中に安心した居場所を築くことになり、他者を信頼する力を育み、自尊感情を高めることになる。
- ・ こうした取組は、経済的に厳しい家庭背景を持つ子ども、不登校傾向の子ども、学力を十分に伸ばしきれず、自分の進路を描くことが難しい子どもにとっても信頼する他者の力を借りながら、自らの生き方を切り拓いていく力を育んでいくことにつながる。

3. 特色ある実践事例の内容

○ 取組のねらい

子どもたちは、近年の少子化や高度情報化社会の進展の中で、あふれるほどの情報を得る一方で、自分が暮らす地域社会に関心が低く、地域のことを知らないまま成長している実態がある。また、長引く不況により経済的に厳しい生活背景を持つ子どもは、将来に希望が持てず、自分の将来像や生き方を描くことが難しい。

「教育は、自分探しの旅」とも言われる。自分を見つめ、自分を発見する力の育成が求められている。そして、これらの力の基盤となるものとして、身近な他者とのつながり、信頼し合う関係と、「自分を大切にすると共に、他者も大切にする」人権意識・人権感覚を培うことが求められる。

○ 取組の内容

本校では、地域の歴史、暮らし、環境からの学びを大切にし、2年生から地域に出かけ、商店、工場、事業所、文化施設など、地域をくまなくフィールドワークをしながら、「ひと、もの、こと」と出会う学習活動を重ねてきた。また、地域の人々をゲストティーチャーとして招いた学習にも積極的に取り組んできた。地域からの学びの中で、地域の人々の生き方に学ぶとともに、子どもたちへの願いも聞き取ってきた。特に、本校区には様々な人権問題が厳存している。そうした問題の解決に尽力されてきた先達の思いや願いに触れることで、より確かな人権意識・人権感覚を醸成しようとしてきた。

こうした取組は、子どもたちが自らの生き方を見つけはぐくむものと捉えてきたからである。そして、学びの過程においても、自分も他者も大切にし、学習活動を通して人間関係を深め、集団としての高まりに迫る「学び合い学習」に取り組み始めた。わからないときは隣の人に訊ける関係づくりや日々の授業の中で子どもと子どもとをつなぐことを積み重ねることで、子どもたちは教室で安心する居場所を確保していく。そのことが、他者を信じる力を育み、人権の学びを他人事（ひとごと）から自分事へと深めていけると考える。

○ 実践事例1

4年生の総合的な学習の時間では、「いのちをいただく」というテーマで食肉について取り組んでいる。食肉の文化は、屠殺に関わる人や地域への差別や偏見と結びつき、部落問題の根源的な要因の一つとなっている。

ところが、近年では「命を屠（ほふ）る」人や場面は、ふだん目にすることも聞くこともほとんどなくなり、部落に対する差別や偏見だけが一人歩きしている。そのため、包み隠された部落に対する意識は、それを吟味する情報や材料を与えられないまま、世代を超えて受け継がれてしまっている。

そこで、乳搾り体験をしたこともある牛とふだん食べている牛肉の間には、いったい何があるのだろうと子どもたちに投げかけ、取組を進めた。自分たちの暮らしの中で牛に関係があるものをたくさん見つけ、実際の精肉の現場のビデオを見たり、「うちは精肉店」（本橋成一著、農山村文化協会）という絵本で、その仕事を生業にしている人と出会った。学習を進めながら、お互いに感じたことや考

えたことを聴き合っていく中で、次のような感想が出てきた。

「牛を殺すことは誰でもこわいことだと思います。(中略)私たちは一人では生きていけないです。たくさんの他の動物や作物、それに牛があって、生きているんだと思います。でも私は牛を殺すことはできません。(中略)しかし、その牛がたくさんの人の力となって、えいえんとひきつがれていくなら、わたしは牛をころす仕事も悪くないかなと思います。でも、とてもとてもむずかしいと思います。」

ちがった考えや深く考えていることに触れ、揺れながら一人一人が世の中の見えないところにある真実に少しずつ近づいていった。

○ 実践事例 2

6年生では、地域の歴史を詳しく調べるためにフィールドワークに出かけたり、聞き取りをしたり、地域の食文化に触れたりする学習を進めた。そのまとめとして、『山の粥』（川元祥一著、解放出版社）という岡山県に伝わる部落の伝承話を時間をかけて丁寧に読んでいった。この話は、「山の麓に住み、近隣の農民からも厳しい扱いを受けていた被差別部落の人々が、山の粥を作り、飢饉の際に農民たちにもふるまい、多くの人を助けた。」という内容で、子どもたちは地域の食文化として『油かす入りの粥』を食べたこともあり、引き込まれるように読んでいた。

そして、一連の授業の後、「今自分たちの周りに同じようなことはないか」を聴き合った。すると、学級が荒れていた過去のことを思い出し、「人の嫌がることをやっていた。止めようと思っても止めることができなかった。止めたら自分がやられるから。」「あのときは自分じゃない自分を生きていた。」など、なかなか表に出せないでいたつらさ、弱さ、悩みを語り合う時間となった。

4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

実践事例 1 について

- ・ 精肉店は、校区内にあり何度も話を聞くことができるが、屠場で働く人が身近にいないので、写真や絵本を通しての学習が多くなり、子どもたちの実感から遠ざかってしまう。そのため、教師が他地域にある屠場を見学し、それをビデオ撮影し、子どもたちと一緒に見た。
- ・ 牛を解体する場面などは、子どもたちに刺激が強すぎることも考えられるので、そうした場面は、白黒のイラストで子どもたちと一緒に学習した。

実践事例 2 について

- ・ 部落問題を地域とつないで学習することについては、それぞれの保護者によって考え方が様々である。そのため、取り組み始める前に家庭訪問などを重ねながら、保護者とじっくりと話し、学校での取組を説明し理解していただいた。
- ・ 教材文に出てくる山の粥については、ふだんの食生活にほとんど出てこないのので、地域の人に協力していただいて、地域に昔から伝わる粥を作っていただき、子どもたちと一緒に食べることにより、教材を深めていく一助とした。

5. 実践事例の実績、実施による効果

学び合いの学習を基盤に据えて、聴き合える教室づくりと「わからないときは、どうするの」と隣の人に訊聞ける関係づくりを進めてきた。また、従来の一斉授業ではなく、ペアやグループといった協同学習を入れた問題解決型の授業づくりにも取り組んでいる。

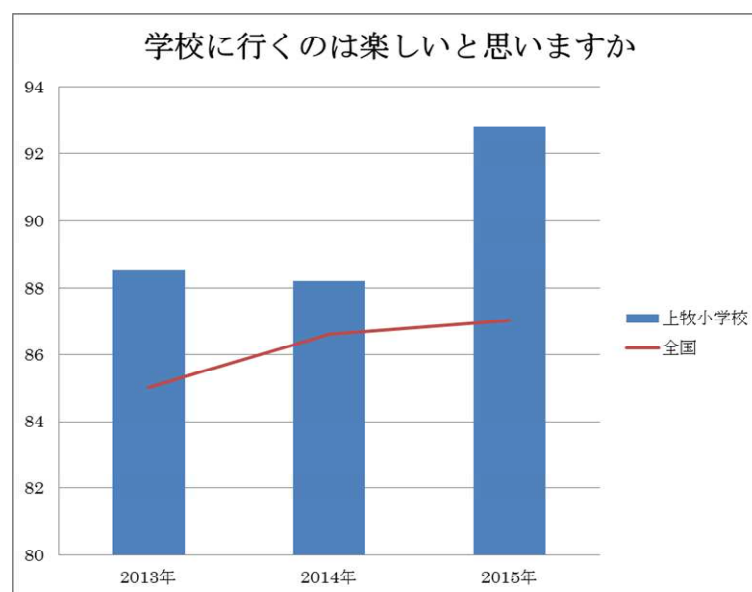
日々の教科学習の課題のレベルを少しずつ上げながら、上記の取組を積み重ねることによって、少しずつではあるが、「一人一人の学びを保障する」とともに「子どもと子どもとをつなぐ」ことが見える形となってあらわれてきた。

そして、そうした基盤があって、子どもたちは教室で安心する居場所を確保し、他者を信じる力を育み、人権の学びを他人事から自分事へと深めていけると考え、取組を進めている。

○ 子どもたちの変化

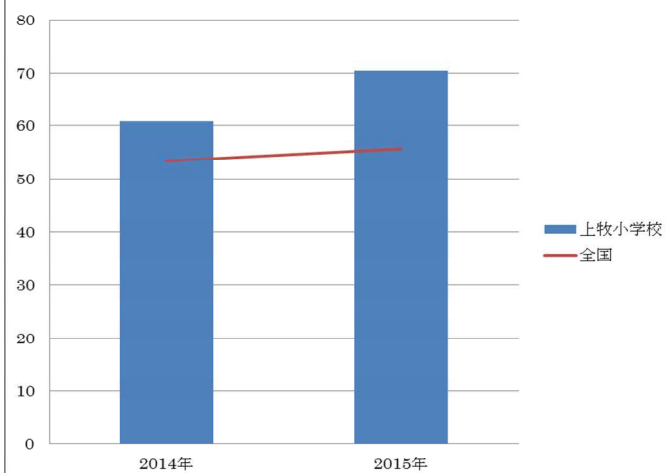
まだ、学力向上には反映されていないが、学校全体が落ち着いてきた。教室を抜け出す子どもがいなくなり、ケガをする子どもも減り、ガラスが割れることもほぼなくなってきた。

学力学習状況調査で、最近の子どもの変化を見てみると、「学校に行くのは楽しいと思いますか」という項目では、92%を超える子どもたちが楽しいと感じてくれるようになっている。

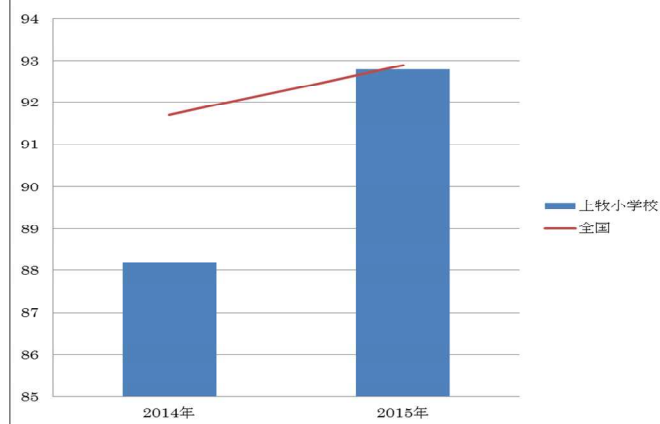


また、「授業中に分からないことがあったら、先生や友だちに尋ねる」、「友だちと話し合うとき、友だちの話や意見を最後まで聴くことができますか」、「学級や友だちとの間で話し合う活動をよく行っていたと思いますか」という項目から、互いに訊ける関係を徐々に築けているということがうかがえる。これは、聴き合い学び合う教室づくりを大切にしながら日々の授業づくりを進めてきている成果だと考えられる。

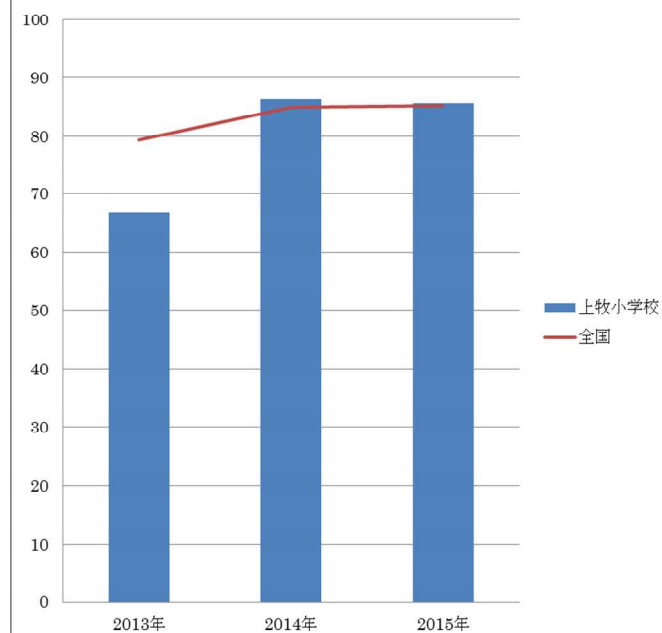
授業中に分からないことがあったら、
先生や友だちに尋ねる



友だちと話し合うとき、友だちの話や意
見を最後まで聞くことができますか



学級の友だちとの間で話し合う活動をよく
行っていたと思いますか



○ 改善を図った点

- ・ 授業を撮影したビデオを通して、授業を検討する部会別研修や研究授業、またその際に講師によるすべてのクラスの授業参観と指導助言など、互いに教室を開きながら、授業づくりを進めた。
- ・ 夏期休業中を利用して、授業づくりに取り組み、模擬授業などを通して、授業検討を進めることで、教師個々の知識や経験を交流し、授業を練り上げた。こうした時間をかけた授業づくりは、特に若い教員にとって学びを確かにしていた。

6. 実践事例についての評価

実践事例1について

- ・ 課題と向き合いながら、他者の意見をじっくりと聴き、自分の考えと擦り合わせることができた。それぞれが感じたことや考えたことを交流し、しつとりと聴き合う時間となった。
- ・ 今まで出会ってこなかった暮らしの裏側に隠れて見えないことと、自分とを重ね合わせながら深く考えることができた。世の中から避けてみられがちな仕事を生業とする人に対して、自分たちの暮らしを支える大切な仕事だと直視し、新たな視点を子どもたちそれぞれの中に取り入れることができた。

実践事例2について

- ・ 部落問題学習についての学びを通して、子どもたち一人一人が、自らの差別・被差別の体験と重ね合わせながら読み進めることができた。
- ・ 胸の奥にしまっておいて、ふだんほとんど話すこともない自らの弱さやつらさと向き合い、交流することができた。そのことが、子どものつながりをより深めることになった。
- ・ 部落問題が他人事ではなく、自分たちの身近なところと結びついていることに気づき、自分事として学ぶことができた。

課題

- ・ 聴き合い学び合う教室づくりと人権学習を両輪として進めてきたが、聴き合う関係づくりを教室に実現していくことがなかなか難しい。学校全体で取り組んでこそ、子どもたちの中に定着していく。しかし、毎年教員が入れ替わり、学び合いについても人権学習についても、お互いに理解を深めていく時間が足りないように感じている。
- ・ 教員同士が同僚性を高めていくことで、授業づくりの際に率直な意見交流ができ、子どもたちの力を育むことになるが、教室を開いて互いに授業をたくさん見合う機会もなかなか作ることが難しい。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

奈良県上牧町立上牧小学校

全教育活動において人権尊重の精神を基盤におき（「第三次とりまとめ」第2章第1）、子供個々の可能性を最大限に生かす教育活動を展開している。地域性を考慮し、不合理・矛盾や差別に気づき、それを公正にみる知識や認識、感性を育てる態度や実践力を身につける具体事例が豊富である。特に、地域の歴史や暮らし、環境からの学びを重視し、「ひと・もの・こと」と出会うフィールドワーク学習を低学年から積み重ねている点や、地域のゲストティーチャーからの学びが、人々の生き方を理解し、地域の歴史や人権問題に触れる機会を設定している点など、人権意識と人権感覚の醸成が、意識的に取り組まれている。4年生の「いのちをいただく」という食肉文化の学習は、屠殺に関わる人や地域への差別や偏見と結びつきを理解できる。日々の課題に直接的に向き合いながら、他者の意見をじっくりと聴き、自分の考えと擦り合わせる体験を重視した取組である。